

令和 2 年 5 月 11 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02534

研究課題名（和文）マーク・トウェイン晩年のユーモア 笑いの武器 による批評精神

研究課題名（英文）Mark Twain's Humor in His Last Years: Using the Weapon of Laughter

研究代表者

井川 真砂 (Igawa, Masago)

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：30104730

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は相対的に看過されてきたマーク・トウェイン晩年期研究の一環として、世紀転換期(1890-1910)における本作家のユーモアの考察に焦点を当てる。ユーモア作家としてスタートしたトウェインは、当初のユーモアを変容させ、地球規模の社会的・政治的視野を身につけ、世界の愚かな「滑稽さを見抜く力、その認識力」、つまりはユーモアのセンスを磨いていくのである。その晩年、ユーモアのセンスを笑いの武器にしてペンの力を発揮する。そうしたユーモアを分析し、その批評精神を芸術活動における自我実現の範囲を超えた社会的な在りようとして示した。今なお流布する「暗い作品に色取られた晩年像」を見直す研究である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マーク・トウェイン研究史において、晩年期の研究は長い間相対的に看過されてきた。その結果、複雑なその晩年像はなお不十分な理解に留まっている。いわんや晩年期のユーモアについては、まだまだ十分な理解に至っていない。ユーモア作家としてスタートした本作家のユーモアの行方、その修辞学の変容を追究することは、文芸批評の理論問題ともかわり、その学術的意義は大きいと言えよう。

では、社会的意義はどうか。死後100年以上を経た今日もなおアメリカで大きな人気を誇る作家であることは、没後100年に出版された新版『自伝』50万部の売れ行きからも分かるだろう。社会的影響力の大きい作家であることの意味は言うまでもない。

研究成果の概要（英文）：This project focuses on a relatively neglected period in Mark Twain's life and work, namely, his last years at the turn of the century between 1890 and 1910. How did his humor work in those days? Twain started his writing career as a humorist, but according to his autobiographical dictation on July 31, 1906, he was not "a mere humorist." What did he suggest by this dictation? I argue that his humor rhetoric transformed socially and politically with a global perspective, as seen in *Following the Equator*. For him, having a "sense of humor" meant seeing the "funny" of ridiculous things, such as atrocities in this world, and laughing at them. He used his humor rhetoric as a weapon of laughter for going beyond simply aesthetic writing. Complex as his last years might have been, the picture I draw here might help readers to see a Mark Twain who was still quite active and not necessarily pessimistic.

研究分野：人文学

キーワード：晩年のマーク・トウェイン アメリカ文学 ユーモア 19 - 20世紀転換期 笑いの武器 カーニバル

1. 研究開始当初の背景

(1) マーク・トウェイン研究史において、晩年期の研究は長い間相対的に看過されてきた。その結果、複雑なトウェイン晩年像はなお不十分な理解に留まっている。いわんや晩年期のユーモアについては、まだまだ十分な理解に至っていないとは言えない。トウェイン晩年期研究の一環である本研究課題「晩年のユーモア——笑いの武器による批評精神」については、いまだ未解明の状態であった。

(2) それでも近年、トウェイン晩年期研究に関心が向けられるようになり、21世紀に入って、その成果が以前よりも見られるようになってきた。なかでも、19-20世紀転換期のトウェインを特集した *Arizona Quarterly: Journal of American Literature, Culture, and Theory* (Spring 2005) 誌中の諸論文は、新たな先行研究として注目すべきである。また国際シンポジウム「“The Mysterious Stranger Manuscripts” 執筆 100 年記念」(エルマイラ大学、2008 年) の成果を纏めた Joseph Csicsila and Chad Roman, editors, *Centenary Reflections on Mark Twain's No. 44, The Mysterious Stranger* (U of Missouri P, 2009) や、トウェイン最晩年の 3 年半に絞った伝記『白い服の男 マーク・トウェイン——最晩年の大冒険』(Michael Shelden, *Mark Twain, Man in White: The Grand Adventure of His Final Years* (Random House, 2010)、さらには無削除新版『マーク・トウェイン自伝』 *Autobiography of Mark Twain, 3 Vols* (Univ. of California P, 2010-2015) がトウェイン没後 100 年記念の年に出版された。とりわけ新版『自伝』3 巻は「トウェイン文学最晩年の重要な著作」(Harriet E. Smith) であり、本研究にとってきわめて貴重な資料が加わったことを意味する、歓迎すべき時期であった。

(3) 上記特集号 *Arizona Quarterly* のゲスト・エディターにも注目しておかねばならない。編者 Shelley Fisher Fishkin (Introduction “Mark Twain at the Turn-of-the-Century: 1890-1910” by Fishkin and Forrest G. Robinson) こそは「1999 年京都アメリカ研究夏期セミナー」基調講演者として招聘した[合衆国]トウェイン協会会長[当時]である。同夏期セミナー文学部門の計画立案およびテーマ設定に参画した私は、基調講演「世紀転換期のアメリカとマーク・トウェインの歴史意識」(“Mark Twain's Historical View at the Turn of the Twentieth Century”) を同教授に依頼するとともに、私自身も文学部門で研究報告をした。当該テーマの面白さと重要性を改めて認識したのは、それを企画・運営した私たちだけでなく同教授自身でもあったことが、京都セミナー後に出版された *Arizona Quarterly* 特集号ゲスト・エディターを務めたことから推察できる。「こうした動きは、トウェイン晩年期研究への後押しを意味する」との思いを強め、私は当該研究に対する問題意識をいっそう明確なものにした。じつは「晩年のマーク・トウェイン研究」こそは、1970 年以來、私自身が取り組んできたテーマなのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究はマーク・トウェイン晩年期研究の一環として、トウェイン晩年のユーモアに焦点を当て、笑いの武器を行使するその批評精神を考察する。

(2) トウェイン晩年期のユーモアの考察を通して、今なお流布する「暗い作品に色取られたトウェイン」晩年像の見直しに積極的に寄与する。

3. 研究の方法

(1) 晩年のトウェインはユーモアをどのように定義しているか。

トウェインが示す唯一の定義と云うものは、“The Chronicle of Young Satan” [1897-1900] の中で少年サタンが力説するユーモア論議中に見出す他はなく、そこでのユーモアのセンスや笑いの武器の意味内容を、まずはテキストに基づき確認する。ついで、そのユーモアが作品中いかに表象されるかを検討し、晩年のユーモアの特徴を分析する。ユーモアによる表象例を検討する作品として、上記の他に *Following the Equator* (1897), “The Man That Corrupted Hadleyburg” (1899), “King Leopold's Soliloquy” (1905), *Extract from Captain Stormfield's Visit to Heaven* (1909), *Autobiography of Mark Twain, 3 Volumes* (2010-2015) 等があげられる。

(2) トウェインが青年期にアメリカ南西部で習得したユーモアは、反帝国主義言説の修辞の中でも生き続けるか。

「マーク・トウェインと世紀転換期(1890 - 1910) 反帝国主義言説の修辞」(2010 - 2012 年度科研費助成) の成果により、世界一周講演旅行記 *Following the Equator* の中にみられるトール・テール(tall tale ほら話)やホークス(hawks ひとかつぎ)等、トウェインが青年時代に習得したアメリカ南西部ユーモアは、反帝国主義言説中の修辞になろうともその語りの中で生き続けることが分かった。彼のユーモアの修辞は変容しながら、生き続けるのである。

(3) トウェイン 70 歳の自己認識によると、彼は「単なるユーモア作家」(*Autobiography, Vol. 2, p.153*) ではない。それは一体何を意味するのか。

Autobiography of Mark Twain, 3 Volumes では、「執筆の現在」の思索をたづねる。「晩年のマーク・トウェイン 新版『自伝』(2010)に見る著者の歴史意識」(2013 - 2015 年度科研費助成) の成果を活用し、本研究課題にとってきわめて有益なヒント「単なるユーモア作家に過ぎないなら、生き延びることは出来ない」の意味を探る。

(4) トウェイン晩年の「笑いの武器」が“sense of satire”の傾向になるのは避けられないか。それは避けられまい。ならば本研究ではジェームズ・M・コックス(James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor* [Princeton UP, 1966])の見解(“sense of humor”と“sense of satire”とを截然と区別する[286])とは異なつてこよう。なぜなら本研究では脱歴史主義の立場を採らないからである。あくまでも現実社会との関わりの中に著者の創作活動を位置づける。ならばトウェイン晩年のユーモアを、パフチンやホイジンガによる 笑い や 遊び の概念を使って照射してみたらどうなるか。とりわけパフチンのラプレー論(カーニバル化 の概念)を試してみたい。

4. 研究成果

(1) 晩年のトウェインはユーモアをどのように定義しているか。

晩年のトウェイン像自体がまだ未確定であり、ましてや晩年のユーモアについては未解明といってよい現況にある。本研究におけるトウェイン晩年のユーモアは、アメリカ南西部ユーモアを起源にしながらも、トウェインによって地球規模の社会性・政治性が賦与され、当初のユーモアはその修辞を変容させていく。

トウェインが示すユーモアの唯一の定義と言っているものは、“The Chronicle of Young Satan”の中で少年サタンが力説するユーモア論議中に見出す他はない。それを読む限り ユーモアのセンス“sense of humor”とは、ユーモアを認識する力“humor perception,” p. 166 を意味する。そして ユーモアを認識する力とは、道理に合わぬ滑稽さ“funniness”を見抜く力のことである。それも高級な滑稽さ(たとえば貴族制度だとか、宗教だとかの滑稽さ)を見抜く力を言う。だからこそ少年サタンは「ユーモアのセンスを身につけよ」、その力は養成できるのだからと説くのである。サタンは ユーモアのセンス を 笑いの武器 として使う。その結果、晩年のユーモアは、きわめて転覆的な性格を帯びることにもなる。だが、そうしたユーモアの意義は大きいと言えよう。ついで、そのユーモアが 笑いの武器 として作品中いかに表象されるかを“The Man That Corrupted Hadleyburg”において検討した(後述)。

(2) 青年時代のトウェインがアメリカ南西部で習得したユーモアは、反帝国主義言説の修辞の中でも生き続けるか。

彼のユーモアは生き続ける。そのユーモアは、地球規模に広がる創造空間において社会性・政治性を賦与され、壮大な構想に変容するのである。たとえば *Following the Equator* 中、トウェインは 真 と 偽 の境界を攪乱する P・T・バーナムによる「ほら話」(シェイクスピアの生家を購入してアメリカに移築する企てで「一杯食わせる」)のきわどいアナロジーを滑り込ませる。本旅行記の読者は、ほとんど一杯食わされてしまいそうになる。そうかと思えば、南アフリカの旅について語る時、まるで P・T・バーナムと見まがうばかりのセシル・ローズ(大英帝国ケープ植民地首相)の 真 を装った 偽 による「トランスヴァール併合の策謀」ぶりを、読者にはそれと分かる「ひとつづき」話で語る。小国を併合し金鉱山を強奪しようと企むセシル・ローズの策謀を、道理に合わぬ「滑稽“funniness”」な企てであるとトウェインは見抜くのであり、ローズの策謀を唾うのである。シェイクスピアの生家の買収ならぬ、セシル・ローズによる金鉱山強奪という一大スキャンダルであり、ボーア戦争を引き起こす大事件であるこの政治問題を、トウェインは暴露しようとする。その語りに活かされる修辞こそ、トウェイン晩年のユーモアなのである。

(3) トウェイン 70 歳の自己認識によると、彼は「単なるユーモア作家」(Vol. 2, p.153)ではない。それは一体どういう意味か。

トウェインが示すユーモアの定義と言っているものは、これまで、唯一“The Chronicle of Young Satan”の中で少年サタンが力説するユーモア論議中に見出す他はないと思っていた。だが今それを訂正せねばならない。新たな資料、新版『自伝』第2巻(2013年)に、少年サタンのユーモア論議を補うものが見つかるのである。

ユーモア作家として活動してきた自己を振り返るトウェインは、その日の『自伝』口述(July 31, 1906)において、こう語る。いくら有名なユーモア作家であろうとも、「単なるユーモア作家に過ぎないなら、生き延びることは出来ない」(153)、と。なぜなら「ユーモアとは、ただの香りづけであり、飾りつけにすぎない」(153)からである。「私はいつも説教をしてきた。だから、30年間持ちこたえたのだ(“I have always preached. That is the reason that I have lasted thirty years”)。もしユーモアがおのずと生まれて来るなら、その説教の中にそのまま入れておいた。しかし私はユーモアのために説教を書いていたわけではない」(153)と語り、おのずと生まれるユーモアであるいじょう、その説教に活かすまでだ、と。ユーモアがおのずと生まれて来るからには、そう書くしかないではないかと言わんばかりである。もちろん、ここで肝要なのはまず説教であり、その「香りづけ」、「飾りつけ」にユーモアを活かすという点である。ユーモアは単に芳香であり、装飾にすぎないのだから、本体の説教(“my sermon”)こそが何より大事。ユーモア文学の中身に立ち入ったこうした表明は、トウェインには稀なことである。晩年期トウェインのユーモアを考察する上で示唆に富む。ただの香りづけを一番の目的にするような「単なるユーモア作家」ならば、生き延びることができないわけである。

ついでユーモア文学を、今度は（高尚な文学である）小説と対比してこうも語る。「小説はもっぱら芸術作品であるべきなので、そこで説教してはならず、教訓を垂れてもならぬと説く人たちがいる。なるほど小説に関してはそうかもしれない、だがユーモアに関してはそうではない。もちろんユーモアにおいてうわべだけの教訓を垂れてはならず、うわべだけの説教をしてもならぬのだが、ユーモアがずっと長く生き続けるためには、その両方をきちんとやらねばならぬのである」と。このように敷衍するあたり、高尚な純文学に対するトウェインの少なからぬ対抗意識が表れているかもしれない。謙虚なポーズを執りながらも、おのれの文学に対する矜持が齎す、屈折の入り混じった複雑な意識は、少なくとも「芸術のための芸術」や「高尚な文学」への揶揄を含意していると受けとれなくもない。

過去40年ばかりの間に世間から忘れられてしまった78人もの大勢のユーモア作家たち——ペトロリアム・V・ナズビーやアーテマス・ウォード、ヨーコブ・ストラウスなど——が活躍していた頃を思い起こしながら、なぜ彼らが世間から消えてしまったかを語るのであり、また同時に自分が生き延びた理由を語り、いつの間にか高尚な文学にも矛先は向かうのである。トウェインとは言えば、彼はいつも説教をしてきたので生き延びたのだが、それもユーモアの芳香のある説教をしてきた、という話になるだろうか。なにしろ「私はこの世を去った者であり、墓の中から語っているのだから、こんな自惚れたことを腹藏なく言えるのである。いくら私だって生きていたらこうまで厚かましくは言えないだろう」と、自分の死後100年を経て出版予定の『マーク・トウェイン自伝』読者を想定し、思うところをこうして率直に語るのだと言うのである。

トウェインは、“How to Tell a Story”の中で、アメリカのユーモラスな語り方の奥義をもっぱら取り上げた。何よりも重要な絶妙な「間」の取り方は、その話芸を真に習得しなければとてもできるものではない、それはまさに「繊細な美しい技芸(アート)」である、と。それに対し、この日の『マーク・トウェイン自伝』口述では、ユーモアの内実に言及する。その点できわめて貴重である。たとえ示唆的な言及に留まっていようと、意味深長だと言わざるをえない。

(4) トウェイン晩年の「笑いの武器」が“sense of satire”の傾向になるのは避けられないか。

それは避けられまい。本研究では脱歴史主義に陥ることなく、歴史の中にトウェインの創作活動を位置づける。そこで、バフチンによるラブレール論（『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』）を援用して、トウェイン晩年のユーモアを照射したらどうなるか。とりわけバフチンの「カーニバル化」の概念を“The Man That Corrupted Hadleyburg”(1899)に適用したらどうだろうか。

まず、フランソワ・ラブレール作『ガルガンチュアとパンタグリユエル』全5巻(宮下志朗訳、2005-2009年)を読み、トウェインがラブレールに魅かれたという理由を手探りした。そこで得られた私の感触は、「トウェインとラブレールとの共振要素は少なくない、これは援用可能な徴候である。もっとも、トウェインはラブレールほど骨太でないかもしれぬが」だった。トウェインとの共振要素の中でも作品世界の豊饒さ、予想外の脱線やプロット展開、冒険旅行や、時事的社会的批評的要素、既成のキリスト教会への懐疑的・批判的姿勢、支配文化への抵抗、知への欲求、理性の尊重、生命の賛歌、口語や民衆文化への共感等々、いくつも挙げるができると思った。すなわち、トウェインの読解にはラブレールからの援用ができると思った。

ついで、ミハイル・バフチンによるラブレール論（『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、川端香男里訳、1997年[第1刷、1973年]）に大いに啓発された。バフチンの議論には、ラブレールに対する私の当初の「つまずきの石」(129)を払拭する力強さがあり、「世界の豊かな物質的原理」(239)、物質的存在としての人間の「グロテスクな肉体のイメージ」(267)、民衆の「グロテスク・リアリズム」(418)、「民衆の笑いの文化」(239)等々に、目を啓かせた。バフチンはこう論じる。中世の人びとの生活に大きな場所を占めていたカーニバル型の祝祭は、「民衆的・広場的笑いの側面」(12)をもっており、ヨーロッパ中世のすべての国に広まっていた。ルネッサンス思想が「中世の公的文化」と戦う際にただひとつ支柱を与えることができたのは、「何千年にもわたって形成されてきた民衆の笑いの文化」(239)だけであった。「中世の公的文化」とは、別言すれば、公的な第一世界の文化、封建的な文化、カトリック教会という単一組織によって支持された文化、畏怖と強制に基づいた一面的な生真面目なゴシック文化のことである。カーニバルは「公的な世界観の支配から意識を解放し、世界の新しい見方を可能にした。新しい見方は、畏怖、敬虔の念もなく、絶対的に批判的であると同時に、いささかのニヒリズムも持たず、肯定的であった。なぜなら、世界の豊かな物質的原理、生成と交替、新しきものの不敗性、新しきものの相変わらぬ勝利、民衆の不死を明らかにして見せたからである。これはゴシックの世紀の攻撃に対する強力な支えとなったし、新しい世界観の基礎を打ち立てる際の支柱となった。これは先刻語ったあの意識のカーニバル化である。それはゴシック的生真面目さからの完全な解放であり、それによって、新しい、自由で酔いしれていない真剣さへの道を準備しえたのである」(239)、と。

「バフチンの「カーニバル化」の概念は、“The Man That Corrupted Hadleyburg”の読解に適用できる有益な方法である」(171-72)と論じるのは、ピーター・メセントである(Peter Messent, *The Short Works of Mark Twain: A Critical Study*, 2001)。メセントはカーニバル化する公会堂の民衆を描いたトウェインを積極的に評価する。ただしメセントは、作品結末の読解では、民

主主義的な価値観等に対するトウェインの姿勢に「積極的な響きが少ない」(182)とするため、トウェインが「民主主義的な価値観や民衆のエネルギーに対する姿勢に相反する感情をもつ」(182)という結論を導き出す。そして、なぜか「トウェインの執筆人生のこの時期までに、それらに対する姿勢はかなり暗いものになっていた」(182)とする最後の一文を書き加え、暗さを当然視するような結語とする。

だがブルース・マイケルソンの場合は、(メセントにバフチンを読む刺激を与えた)「ハドリーバーグ」論の中で、メセント以上に積極的に公会堂のカーニバル化現象の具象化を評価する(Bruce Michelson, *Mark Twain on the Loose: A Comic Writer and the American Self*, 1995, ch. 4)。公会堂の民衆は町の特権階級に「復讐」(181)するだけでなく、「自分自身を解き放つ“freeing themselves”」(181)と指摘する。すなわち町の裕福な支配層がもたらす“威圧感”や、むかつくような“優越感”、もったいぶった“道徳意識”等々から自分自身を解き放ち、社会的政治的なヒエラルキーを窓の外へと放り出すのである、と。その「公会堂におけるユーモアと仲間意識“the good humor and fellowship of ‘the house’”」(181)は、たとえそれが一瞬のことであれ、お互いにばらばらの状態を取り除き、自分の中の閉塞状態を取り去るのだ。これが「この物語の弾むような肯定面である “[o]ne buoyant affirmation in this tale”」(181)。物語結末でそれが萎んでしまうと評するマイケルソンではあるが、この「弾むような肯定面」の主張は揺るがない。

マイケルソンの指摘する上記「肯定面」こそ、バフチンが述べる「カーニバル的意識」、「カーニバル的なパトス」(240)を指すであろう。バフチンが論じるルネッサンスの大文学(シェイクスピアやセルバンテス)の中に浸み渡る(ラプレーほど一目瞭然の形ではないものの)「カーニバル的雰囲気、民衆的・祝祭的広場の自由気ままな風」(240)が、トウェインの描写する公会堂の場面にも、やはりはっきりと吹いているのではないかと私は思う。解釈に差異が生じる問題は、直接的には、トウェインの本作品結末の解釈如何に依るのであるが、バフチンの言うカーニバル化現象の理解と不可分の関係にあるだろう。そしてもちろん、それはトウェイン理解そのものとも不可分の関係にある。

じつは、バフチンにはまだ続きがある。すなわち「中世の公的な文化は、その全形式、イメージ、抽象的思考体系のすべてを援用して、これ[カーニバル的なパトス]と真正面から対立する信念(つまり、現存する世界秩序、今ある真実の不変性、に対する信念)を吹き込んだのであった。このような信念の鼓吹は、ルネッサンス期にもまだ強力であって、個人的な思索探求や古典の典拠の書齋的研究(カーニバル的意識の光に照らされていない研究)によってはとても打ち負かすことは出来なかった。真の支柱を与えることができたのは、民衆文化だけだったのである」(バフチン 240)とあるように、人びとの意識を包み込む中世の公的文化の巨大な支配力下で戦うのは一筋縄ではいかないものだった。その一筋縄ではいかないさまは、アメリカ19世紀末の連邦政府や州政府の巨大な支配力がトウェインの「ハドリーバーグ」の結末描写への支配力として働いているさまにも表れているようだ。一見するとこの結末もまた「回避(イヴェイジョン)の結末」に見えるかもしれない。だが、「[カーニバル]の影響は多くの場合、隠され、そのままの形では現われず、補足しにくい」(バフチン 238-39)ものなのだ。補足し難さはあるものの、“The Man That Corrupted Hadleyburg”を含むトウェイン晩年の一連の作品は、マイケルソンの論ずるように、そうやすやすと「読解の単純化を許さない」(Michelson 179)と言えるだろう。ハドリーバーグの民衆意識のカーニバル化の余地・可能性は「不正直なその男[支配階級の一人]はほら吹きとしてこの町の名誉を穢したのだから、これからはこの町には住み難くなるだろう」(46)と言う皮なめし屋の発言が猛烈な喝采を受ける描写にみるように、作中にそうした可能性の含意がなされていると私は読む。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井川眞砂	4. 巻 209
2. 論文標題 『まぬけのウィルソン』における人種表象 ジム・クロウ人種隔離法下の創作活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 New Perspective (新英米文学研究)	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川眞砂	4. 巻 17
2. 論文標題 書評 R. Kent Rasmussen, ed., Critical Insights: Adventures of Huckleberry Finn (Salem Press/Grey House Publishing, 2017).	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 マーク・トウェイン研究と批評	6. 最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川眞砂	4. 巻 42
2. 論文標題 トウェインと著作権 『マーク・トウェイン自伝』にみる著者晩年の批評精神	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北アメリカ文学研究	6. 最初と最後の頁 30-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井川眞砂	4. 巻 19
2. 論文標題 アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィンの冒険』論争 学校教育現場からの追放問題と学界における再解釈の進展	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第19回東京科学シンポジウム予稿集	6. 最初と最後の頁 79-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井川真砂
2. 発表標題 文献解題 David Roediger, <i>The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class</i> (1991; Revised ed., Verso, 1999).
3. 学会等名 新英米文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井川真砂
2. 発表標題 再訪 マーク・トウェイン「ハドリーバーグを墮落させた男」 町の名士を黙らせる民衆の圧倒的な声 / 笑い
3. 学会等名 新英米文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井川真砂
2. 発表標題 『まぬけのウィルソン』における人種表象 「分離すれども平等」原則への動きの中で
3. 学会等名 新英米文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井川真砂
2. 発表標題 アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィンの冒険』論争 学校教育現場からの追放問題と学界における再解釈の進展
3. 学会等名 日本科学者会議東京支部
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----